

## 大阪教育大学名誉教授 山際延夫先生 (1929.7.11-2019.4.11) の ご逝去を悼む

谷本 正浩<sup>1)</sup>

Obituary for Osaka Kyoiku University honorary professor Nobuo Yamagiwa  
(1929.7.11-2019.4.11)

Masahiro TANIMOTO<sup>1)</sup>

### はじめに

大阪教育大学名誉教授の山際延夫先生は (図 1), 1929 年 7 月 11 日に長崎市でお生まれになり, 2019 年 4 月 11 日に満 89 歳, 大阪府池田市でお亡くなりになりました。山際先生ときしわだ自然資料館との繋がりは, 初代館長である千地万造博士と長年のご親友であったこと, 同館やきしわだ自然友の会の鉱物関係の活動と指導をしておられる武修次氏が山際先生の教え子であること, さらには 2005 年 1 月 30 日に行事として, 「お部屋で化石観察-ボウスイ虫ってなんだろう?-」の講師としてご指導いただいたこと等が挙げられます。山際先生の業績に関しては, 退官に合わせて, いくつかの出版物が出されています。ここでは, 退官時以降に出された出版物, そして山際先生の思い出に関してご紹介させていただきます。

### 退官に合わせた出版物

山際先生の業績については, 大阪教育大学の退官に合わせて出版された前田 (1996) で, 主に国外でのご活躍の様子が紹介されています。また, 1995 年ごろまでの業績や, 山際先生が主たる研究の場とされた志摩地方の地学文献リストが出版されています。

前田四郎, 1996. 山際延夫教授のご退官にあたって. *地学研究*, 45(1): 53-55.

この記事では, 千葉大学の教授であった前田四郎博士を隊長として, 山際先生達がおこなった南米アンデスの調査や中国浙江省での調査の思い出などについて記されています。

山際延夫, 1995. 志摩半島およびその周辺地域の地学文献目録. 1881-1993. 30 p. 山際延夫教授退官記念事業会.



図 1. 鳥羽の恐竜化石発見後間もない 1996 年 7 月 23 日に, 山際先生が化石の産出状況を検分しておられるところ。

これは、山際延夫教授退官記念事業会による2冊の出版物のうちの一つです。1951年に山際先生が「東京文理科大学の進論で、藤本治義先生のご指導の許で志摩半島の中・古生界の研究に着手したのが、地質学・古生物学の研究のはじまりである」と、まえがきに書いておられます。ご両親の故郷であり、山際先生の研究の始まりであるということで、志摩を中心とした地域の地学文献目録を作成されたわけです。この文献目録は、1890年の佐藤傳蔵先生の東京帝国大学卒業研究を皮切りにした志摩半島地域の研究が如何にして進展してきたかを理解し、これらの基礎に立って、今後の資料にするためとしておられます。先人の研究の積み重ねに対する敬意を常に持っておられた、山際先生らしさを強く感じます。

山際延夫, 1995. 山際延夫先生の略歴と業績目録. 17p. 山際延夫教授退官記念事業会.

この出版物には、山際先生が長崎市でお生まれになってから大阪教育大学を退官されるまでの略歴と、1995年までの「研究論文」、「講演要旨」、「解説および報告」、「著書」のリストが掲載されています。次の項目では、退官後に山際先生が執筆された論文などを紹介させていただきます。

### 1996年以降に執筆された著述

ここでは、山際先生から折に触れて拝受した著述のリストを年代順にまとめてみました。さらに、山際先生の門下生である上川容市氏のご協力で、それ以外の出版物についてもリストアップすることができました。他にも抜けているものがあるかもしれません。その際にはご一報いただければ幸いです。

- 奥田 尚・山際延夫, 1996. 高知県三宝山石灰岩から産出したトリアス紀後期の六射珊瑚化石(演旨). 日本古生物学会年会講演予稿集: 45.
- 山際延夫・石原至朗・海東晃子, 1996. 高知県佐川地域秩父累帯南帯の鳥巢層群産出六放珊瑚の1新種について(演旨). 日本古生物学会第145回例会講演予稿集, 145: 50.
- 梅田真樹・山際延夫, 1997. 三重県鳥羽地域の黒瀬川帯から産出したデボン紀放散虫化石. 地質学雑誌, 103(11): 1081-1084.
- 山際延夫, 1997. 松尾層群地質・古生物研究史. 三重県鳥羽市産恐竜化石発掘調査中間報告書: 5-9.
- Niko, S., Yamagiwa, N. and Sugimura, H., 1997. Late Carboniferous Corals from the Oboradani Formation, Fukui Prefecture. *Bulletin of the National Science Museum, Series C (Geology & Paleontology)*, 23(1, 2): 35-49.
- 木村達明・山際延夫, 1997. 松尾層群産出の植物化石について. 三重県鳥羽市産恐竜化石発掘調査中間報告書: 32-33.
- 山際延夫, 1997. 貝化石に基づく松尾層群の地質時代・古環境などについて. 三重県鳥羽市産恐竜化石発掘調査中間報告書: 29-30.
- Yamagiwa, N., Hisada, K. and Tamura, M., 1998. Early Cretaceous Hexacorals from the Western Part of the Sanchu Area, Kanto Mountains. *Bulletin of the National Science Museum, Series C. Geology & Paleontology*, 24(1, 2): 51-66.
- Niko, S. and Yamagiwa, N., 1998. Early Carboniferous Corals from the "Omi Non-Calcareous Group", Niigata Prefecture. *Bulletin of the National Science Museum, Series C (Geology & Paleontology)*, 24(3, 4): 129-150.
- Yamagiwa, N., Asami, T. and Hosono, A., 1999. A Redescription of Permian Rugosa *Waagenophyllum (Waagenophyllum) compactum* Minato and Kato, 1965. *Bulletin of the National Science Museum, Series C. Geology & Paleontology*, 25(3, 4): 105-110.
- Yamagiwa, N., Suzuki, S. and Okimura, Y., 2000. A New Species of *Lithostrotion (Siphonodendron)* (Rugosa) from the Hina Limestone, Okayama Prefecture, Southwest Japan. *Okayama University Earth Science Reports*, 7(1): 47-50.
- 木村達明・山際延夫, 2001. 松尾層群の植物化石. 鳥羽の恐竜化石-三重県鳥羽市産恐竜化石調査研究報告書: 63-64.
- 柏木健司・山際延夫・八尾 昭・江崎洋一・酒折有美子・庄司康弘, 2002. 紀伊半島西部の黒瀬川帯周辺の鳥巢式石灰岩から産するジュラ紀新世刺胞および海綿動物化石とその地質学的意義. 化石, 72: 5-16.
- 山際延夫・藪 彰久・栗尾直美・吉田三郎・宮本淳一, 2005. 兵庫県淡路島に分布する上部白亜系と泉層群産出の六放サンゴ化石 *Platycyathus* の1種について. 大阪市立自然史博物館研究報告, 59: 55-59.
- Yamagiwa, N., Ishihara, S. and Ito, A., 2011. A new species of *Amphistraea* (Scleractinia) from the Torinosu Group, Kochi Prefecture, Southwest Japan. *Memoirs of Osaka Kyoiku University, Ser. III Natural Science and Applied Science*, 60(1): 17-25.
- 山際延夫, 2015. 三重県志摩半島産出のペルム紀前期四放珊瑚化石 *Ivanovia* 属の1種について. 大阪教育大学紀要 第III部門自然科学・応用科学, 63(2): 23-29.

その他に、鳥羽恐竜研究振興会が、鳥羽で見つかった恐竜化石を記念して出版した「なみうちぎわのロマン」に山際先生のお言葉も掲載されています。

山際延夫, 2007. 松尾層群と恐竜化石. 6-6. なみうちぎわのロマン - 鳥羽竜化石発見から 10 年 -. 54 p. 鳥羽恐竜研究振興会, 鳥羽市.

この記事でいかにも山際先生らしいお言葉と思ったのは、「私のささやかな研究が恐竜化石発見に役立ったことは大変うれしいことですが、私自身は、明治以来、志摩半島の地質研究を進めてこられた多くの諸先輩の努力の成果が、白根崎の貝化石発見につながったものと考えております」と書いておられることです。山際先生の先人の研究への敬意の姿勢が、前述の「志摩半島およびその周辺地域の地学文献目録. 1881-1993.」という著書の出版という形になって表われたものであることがよく分かります。

### 山際先生の思い出 (図 2, 3)

山際先生の門下生でもない私が先生の思い出を書かせていただくにあたっては、私自身のことについても、紹介する必要があると思います。正規のコースを経ずに山際先生の教えをいただくようになった変わり者の谷本自身についての理解を得ることなしに、山際先生との繋がりを分かっていたいただくのは困難と考えたわけです。この点について、ご了解いただければ幸いです。

1953 年生まれで、ちょうど山際先生よりも二回り年下の私は、小さいころから生き物好きで、かつ読書好きの「本の虫」でもありました。さまざま動植物を飼育したり、買ってもらった動物や植物の図鑑を見ながら、その絵の模写をしたりして楽しむことが多かったのです。恐竜などの古代の生き物の復元画は、幼い私の心に強烈な印象を与えました。長じるにつれて、復元画を描くために海外の最先端の論文などの文献も収集したいと熱望するようになりました。それが古生物学との出会いでした。

しかし、化石との出会いはありませんでした。化石採集は、アウトドア的な活動です。しかし、私は生来、アウトドア的な活動に耐えるような頑健な身体を持っていませんでした。したがって、「アウトドア派」ではなく、究極の「インドア派」でした。いわゆる「化石少年」ではなかったわけです。分厚い本を持つのは全く苦にならなくても、重たいハンマーを持つのは苦に感じます。ですから、私が若いころ主流だった「地質学との繋がりが濃い古生物学」には、あまり関心がなかったのです。21 世紀前後から主流になってきた「生物学との繋がりが濃い古生物学」なら、事情は大いに違ったでしょう。時代の流れは個人の運命に大きな影響を与えます。

生き物の絵を描くのが好きで、本好きで国語関係でも成績が悪くなかった私は、国語と美術の進路のどちらを選ぶのか迷いましたが、結局進路を美術と定めて、大阪教育大学に入学しました。しかし、大学入学後も大学の附属図書館に毎日のように通って本を借りたり、書庫に入れてもらって、貴重な海外の古生物学関係の文献や戦前の報告等を発見したりして、着々と世界中の古生物関係の情報を集め、知的好奇心を満足させていきました。

山際先生との出会いは 1974 年の春でした。当時は天王寺・池田・平野の 3 分校に分かれていた母校の大学において、美術科の私は池田分校に通っていましたが、天王寺分校に研究室がある山際先生が、たまたま地学を教えに池田分校へ来てくださることを知ったのです。当時の私は、文献に頼りだけの古生物学ではなく、実際の化石を扱う古生物学を知ることの重要性にも目覚め始めていました。ですから、山際先生が池田分校に教えに来てくださることは、私にとって大ニュースだったわけです。前年度に該当の単位は取得していたので、実は単位取得の上では受講の必要はありませんでした。先生のご講義の初日に、「私は古生物学に興味があるので、単位は不要ですが受講させてください」という趣旨のお願いをして、願いを聞き入れてもらいました。

講義の思い出はいろいろとありますが、箕面の古生層（現在では中生代の付加体堆積物とされてい



ます), 中生代の和泉層群, 石橋付近の大阪層群の巡検は, 特に心に残るものでした。この巡検について記録した「野外ノート」は, 今も大切に保管してあります。サルで有名な箕面の巡検では, 参加者の女子学生がサルに襲われて, 軽いけがをしました。このときに山際先生は, すかさずカバンの中から応急手当の道具を取り出し, 手当をしておられました。フィールドに出るときの危険性を予測し, 常に対策と準備を怠らない山際先生の姿を見ることができました。このことで思い起こされるのは, 前田(1996)の中に書かれていた一文です。著者の前田博士は, 南米の4,000 m以上の高地における山際先生の姿を, 以下のように書いておられます。「先生はまた高地での健康管理に綿密で造山運動により隆起著しいアンデス山地の調査中, ご持参の氷砂糖を外国人共同研究者を含め差別なく分配し下され, 疲労をいやすことが不肖にとって忘れ得ない一つの思い出となっている」。上記の二つのエピソードは, フィールドにおける調査が, 常に危険と隣り合わせにあり, その危険を回避するための備えを山際先生が絶えず実行しておられたことの証拠になると思います。

また, 大阪層群の巡検では, 大阪大学の研究室に現物の標本が保管されていたマチカネワニの全身骨格を見学させていただいたのは強烈な思い出です。ガラス越しにマチカネワニを見学したことはあっても, ガラスの障壁がない室内で間近に見るのは, 山際先生の特別なご厚意なしには不可能なことだったからです。この経験は, 私がその後岸和田市等でも見つかったワニ化石の調査にのめり込む大きなきっかけの一つになったと感じています。

こうして夢のような1年が過ぎ去りましたが, 山際先生とのご縁はそれで終わりではありませんでした。先生が「研究室に遊びに来なさい」とお声をかけてくださり, それ以後は折に触れて, 天王寺分校の山際先生の研究室へ遊びに行くようになったのです。山際先生は私のことを「古生物学が好きな美術の学生さん」として受け入れてくださったわけです。おかげで生き物好きの私は, 「元々は生き物だった存在としての化石」自体の魅力にも, 魅かれていくようになっていったのだと思います。

また, 天王寺分校の附属図書館は, 地学関係の文献量が池田分校の図書館と比較にはならないほど充実していたので, 書庫内での古生物学文献探しは, 私にとって「宝の山での宝探し」でした。その中には英語の文献だけでなく, 中国語やロシア語の文献もありました。世界中の古生物学情報を入手するためには, こういった国々の語学の習得の必要性も感じたのです。卒業のために必要のない中国語の単位を習得したのは, 中国の歴史・文学と漢文への興味と共に, 現代中国の古生物学への興味も少なからずあったわけです。

大学卒業後も大学院生として大阪教育大学に留まり, 美術教育や美術理論の研究をおこない, 現在まで半世紀に及んで師事する先生に出会いました。この美術における恩師が, 私の恐竜研究に対しても理解を示し, 面白い懐の深さを持ってくださったことも, 私の恐竜研究への追い風となりました。おかげで, 私が書いた多方面の美術関係の報告も, 大学の美術科の紀要などに掲載していただけるようになりました。このようなわけで, 美術と古生物の二つが, 車の両輪のように私の人生を動かしてくれるようになったというわけです。

古生物復元のための文献収集が文献自体への興味にシフトしていったのは, 私の「本の虫」的な性格によるところが多いにあるでしょう。大学の附属図書館で, 海外の推理小説を毎日のように借りて, 一晩で読み終わることもありました。あるとき最初の10頁ほどで犯人が分かっしまい, 興ざめしてしまっったことがあります。ところが, 並行して読んでいた古生物学の論文では, 一応の結論・解答は出されても, 次の別の研究者によって別の解答が出されることもあります。私にとっては, 作者による「お仕着せの解答」で終わってしまう推理小説よりも, 古生物学の論文の方が謎解きとしては面白いと感じてしまっったのです。こうして, 古生物学の論文自体への興味に目覚めると, 直接的には古生物の復元に関わりのない論文まで目を通したくなってきたわけです。ちなみに, 古生物学の世界



図2. A: 山際先生と亀井節夫京大名誉教授が記念にサインをしてくださった鳥羽の海岸にあった貝殻石灰岩の転石（1996年7月23日に鳥羽の恐竜化石産地にて）、B: ヘルメット姿の山際先生（鳥羽の恐竜発掘調査時）、C: 形見として頂戴した山際先生の「志摩」と書かれた標本箱とプレパラート化石標本、D: 形見として頂戴した山際先生の1973年と1979年における南米古生物調査の記録手帳。

は探偵小説となぞらえられることも多く、私が生前に文献交換などでお世話になったカナダの古生物学者 William Antony Swithin Sarjeant 博士は、古生物学の報告を執筆する傍ら、「シャーロックホームズ」の推理小説関係の著作なども発表しておられます。

大阪教育大学で紀要の地質・古生物関係にも目を通すようになったのは、上記のような流れの中で必然的なものでした。母校が「大阪学芸大学」という名称だった昭和28年度の紀要に掲載されてい



る山際先生の報告「志摩半島白堊系より産する貝化石の研究」に出会い、後にはその報告をよりどころにして鳥羽で恐竜化石を探すことになるのですが、当時は大阪市内に住んでおり、三重県鳥羽は私にとって遠隔の地でした。

私が引き続き大阪教育大学の大学院で美術理論と美術教育の勉強をする傍ら、古生物学文献の収集と訳読にも余念がありませんでした。英語以外に中国語・フランス語も受講し、大学で開講していないロシア語については、せめて文字だけでも取りあえず読めるようになると、辞書と独習用の教科書を買って勉強しました。大阪市の梅田周辺には中国書籍専門店やロシア語書籍専門店があるので、一般には入手しにくい文献も購入もできます。「鉄のカーテン」と呼ばれたソビエト、「竹のカーテン」と呼ばれた中国の文献は、欧米の同好の士やプロの研究者でも入手しにくいものがありました。海外には恐竜などの文献収集を趣味にする人もいたので、私が収集している文献類はユニークなものとして注目され、欧米の文献と交換するようになりました。さらには、そのような活動の中で、オーストラリアにある博物館の研究者との繋がりもでき、文献などの情報交換だけでなく、私が書いた英文原稿に対し、論文の書き方について指導を受けるようになりました。その方は、実質的に古脊椎動物学についての師となり、今に至るまで40年程の交流が続くようになるのです。

こういった活動の積み重ねを山際先生も面白いものごと覧になったようです。教師になってから先生の研究室を訪問したときに、大阪で学会があるので恐竜の復元についての講演をしないかと勧めてくださったのです。当時のことは、断片的な記憶と保存していた資料でたどることができます。また現在では、インターネットで公開されている「地学教育」44巻第1号にも、この大会のことが記録されていました。それによると、先生が実行委員長を務められた「平成2年度全国地学教育研究大会 日本地学教育学会第44回全国大会 大阪大会」の分科会（合同部会）の冒頭で、私が「恐竜の復元」と題して講演をおこなったと記録されています。手元に残っていた当時の資料には、より詳しいプログラムが書かれた開催案内の書類もありました。それによると、大会初日である1990年8月21日の午後の部の最初の講演（13:30-13:45）が私でした。会場は大阪国際交流センターで、広い会場内にたくさんの聴衆がいたことが強く印象に残っています。今プログラムを見返すと、私以外の講演は地に足のついたものばかりでした。最初の講演という、大変目立つ順序にしてくださいしたのは先生だと思います。先生の深い御心のうちは、私には推し量ることなど到底できませんが、正式の弟子でもない私へのご厚情には、今でも大変感謝している次第です。この大会についての思い出を、先生は「大阪の先生方、学生諸君の協力で盛会裡に終了した日本地学教育学会大阪大会」と書いておられます（山際、1995）。この記念すべき行事の中に私も加えていただいたのは、本当にうれしいことでした。

同じ山際（1995）の中で、山際先生は「新キャンパスの柏原で行われた日本古生物学会」について書いておられますが、私はここでも先生にお世話になりました。具体的にいうと、1993年6月26日と27日の2日にわたって開催された日本古生物学会第142回例会で、私は初めて古生物学会での発表を果たしたのです。内容は大阪府の和泉層群で見つかった海棲爬虫類のモササウルス類についてです。当時の私は「大阪府では科あるいは亜科のレベルまで同定できる、初めての中生代爬虫類」と書いています。これは日本古生物学会における、和泉層群のモササウルス類化石の初めての報告でもあります。山際先生のご配慮により、ポスターセッションの際に壁面だけでなく、標本のレプリカを展示できるようテーブルを準備していただきました。

大阪で生まれ育った私にとって、前述したマチカネワニ化石は夢のような存在でした。そして、大阪府側に化石産地がある中生代の地層からの爬虫類化石は、さらに遠い夢の世界の存在でした。和泉層群における爬虫類化石の存在は、そこにある化石産地で活躍する複数の化石採集家が見つけた断片的な化石によって知られていました。その骨の断片の一つをある人から頂戴したこ

とで、和泉層群の爬虫類化石の正体を知りたいという私の願いに火が付きまして。とはいっても、ハンマーをふるって岩石を打ち砕く元気もない私には、あまり実行力はありません。具体的な発見作業の協力や情報提供を受ける必要があります。必然的に私は多くの方々からのご協力・恩恵を得ることになったのですが、それについて書き始めると長大な文章になりますので、別の機会にしたいと思います。このように大きな協力を得ることができたのは、骨化石が見つかってでも文献がなく正体が分からないことから、私のような世界中の文献収集に特化した人間の存在を歓迎し、必要としてくれたからです。こうして、私になすべきことは明確になりました。すなわち、和泉層群で見つかる可能性のありそうな脊椎動物化石の文献を世界中から掻き集めて目を通し、必要と思われる資料を関係者に提供するという作業です。世界中の古脊椎動物関係の文献を集め、それらの文献を漠然と楽しんでいた段階から、地元の化石調査の協力という具体的な作業の段階へと変化していったのです。日本の古生物学とはほとんど縁がなく、海外の同好の士と古脊椎動物文献と情報を交換するだけだった私は、まさしく「地に足のつかないことばかりしてきた」人間でした。しかし、和泉層群における脊椎動物化石の解明という具体的な作業を通じて、やっと日本のフィールドに活動の場を得たわけです。

私が40歳になって、偶然にも三重県名張市に転居したのが鳥羽との繋がりの始まりでした。前述した山際先生による志摩半島の貝化石の報告（山際，1997）を拝見すると、鳥羽の海岸にある地層からは貝の化石だけでなく植物の化石も見つかると書かれています。淡水の地層ではなく、汽水成層の化石産地であっても、陸上の植物化石も見つかる場所です。これなら恐竜化石を見つけることも可能と感じたのは事実です。すでに世界中の文献を収集し、フィールドに弱い私に協力してくれる人を得ていました。さらに、海外の研究者とも繋がりができていました。頻繁に中国の博物館や研究所を訪問して、収蔵庫などで実物の恐竜化石を手にとってじっくり観察していたので、日本で恐竜の骨化石が見つければ、見誤ることはないという自信も付きつつあったのです。

鳥羽の海岸における恐竜化石発見の詳細は、本稿の趣旨ではないので、他の機会に譲ることとします。ここで一点だけ述べるとすれば、「恐竜化石発見」と書きましたが、以前から化石自体の存在は、「珪化木」として知られていたようだという事です。最初に見つかった化石は非常に大きなものでしたから、現地地質や化石の調査をしていた人なら、その存在は知られていたとしても、全く不思議ではないわけです。ですから、厳密にいうなら「発見」ではなく、科学的な根拠に基づき初めて恐竜化石と「認識」したと述べる方が事実に近いといえます。ただの勘で「恐竜化石」としたのではなく、科学的な冷静な視点・根拠が必要だったわけです。

現在は日本でも、海外留学などのプロセスを経た古脊椎動物学の研究者がたくさん活躍しておられます。ですから、脊椎動物化石に対する科学的な観察眼を習得した人が、鳥羽で骨の断面を見つけたら、誰でもたちどころに恐竜化石であると見分けることは容易だったでしょう。私の場合は、そういった日本の古脊椎動物研究の興隆直前に現地を訪問したから、その化石を「恐竜」と認識できたのです。単にそれだけの偶然が、鳥羽の恐竜と私との出会いになったといえそうです。それも元を正せば、山際先生との出会いがあり、先生が若い頃に調査した思い出の場所で恐竜を見つけたという、私の特別な思い入れがあったからに他なりません。私にとっては、山際先生の存在なくして、鳥羽における恐竜化石の「発見」あるいは「認識」には至らなかったわけです。これは山際先生が、先達の研究の積み重ねの上に自身の研究成果があるとおっしゃっていたことの、「実例」の一つにもなるのではないでしょうか。鳥羽の恐竜に対する「発見」、「認識」も、郷土の自然を愛し探求する地元の方々の努力を含め、多くの先人のご苦勞の上に初めて成立する

ものだったといえるわけです。

最初に述べたように、千地博士とも親しい間柄にあった山際先生が、きしわだ自然資料館で古生代の紡錘虫（ボウスイ虫、あるいはフズリナの仲間といった表現がされる）の仲間についての解説をしてくださったのは、2005年1月30日のことです。これは同館の行事で、「お部屋で化石観察 - ボウスイ虫ってなんだろう? -」というタイトルで実施されました。行事案内には、「中・古生代のサンゴ化石と古生代のボウスイ虫化石を専門に研究されている山際延夫先生をお招きし、大阪府と岐阜県で産出したボウスイ虫の化石を観察しながら、いろいろなお話をお聞きます」と書かれています。当時配布された冊子を見ると、講師には山際先生とともに、藤田吉広氏（現・きしわだ自然友の会評議員）も名前を連ねています。

この冊子に目を通すと、紡錘虫の一般的な解説文の後に、「今日観察するサンプルについて」という項目がありました。ここで示されているサンプルは、「大阪府高槻市出灰上条産」と「岐阜県大垣市赤坂町金生山産」の2種類でした。金生山の化石といえば、大垣城の石垣にもその石が使われていて、大垣市の観光の目玉の一つとして使われているほど有名です。一方の高槻市出灰の化石は、それほど有名ではありません。その出灰の化石が観察のサンプルとして使われたのは、大阪府では希少な古生代の化石産地だったからといえるでしょう。岸和田市を含む泉州地域では、中生代（和泉層群）と新生代（大阪層群）の化石は見つかりますが、古生代の化石を含む地層は見つかっていません。ですから、大阪府の北の端とはいっても、古生代の化石がコンスタントに見つかる出灰の化石産地には、大阪府の古生物学を考える上で、格別な意味合いがあるわけです。しかし当時の私は、出灰の化石について山際先生が強い思いを抱いておられたことに、気づいてはいませんでした。

そのことを知ったのは、最近になって拝読した「山際延夫先生の略歴と業績目録」（山際、1995）によってでした。この冊子の「定年退職にあたって」の文章の中に、1953年に大阪学芸大学助手として赴任された際の上司であった坂口重雄教授のことが描かれています。出灰の化石について紹介された文章を紹介します。「若輩の私が先生のお伴をして丹波の調査に出掛けたある日のこと、出灰付近を調査後、昼食のため川岸に降りて行ったところ、目の前に石灰岩の転石を発見した。ルーペで見るとボウスイ虫ではないか。驚いた2人は川筋の沢をたんねんに調査し、とうとうボウスイ虫を含む石灰岩の露頭を発見することができた」、さらにこの文章に続けて「最近本屋で近畿の化石の解説書を拾い読みしていたところ、出灰付近のボウスイ虫の記事をみつけ、40年前のあの場面を思い出しなつかしい限りであった」と記しておられます。出灰の化石への先生の情熱を知り、ぜひ最近の出灰の様子を見に行きたいと思ったのですが、現在の新型コロナウイルスの感染拡大による行動規制もあって、実現できていません。事態が収束に向かった時点で出灰訪問を果たしたいものです。

それから時が過ぎ、2015年に千地博士が逝去された際には、山際先生から関西の古生物学を共にけん引してきた同世代の友人が、次々に世を去っていくことを悲しむ内容のお電話を頂戴しました。私も一緒に悲しみに沈んだものでした。山際先生が逝去された2019年の日本古生物学会和文誌「化石」106号の記事の欄には、50年勤続会員として山際先生に感謝状が送付されたことと学会を退会されたことが記されています。また山際先生がご逝去された4月11日付で、瑞宝中綬章が授与されております。

## さいごに

私には3人の生涯の師がいます。大学と大学院で専攻した美術でご指導くださり、



それ以来半世紀にわたって現在に至るまで、定期的に研究会で教を賜っている美術理論の恩師である那賀貞彦名誉教授。海外の脊椎動物文献情報等の交換作業のなかで、私が書いた拙い英文の原稿に朱筆を入れて添削・指導してくださったオーストラリアのクイーンズランド博物館のRalph E. Molnar博士（ご引退の後、現在はアメリカ在住）。このMolnar先生とは、それ以来40年程の交流をさせていただき、現在に至っています。そして、母校の大学で地学を学んだことがきっかけで、半世紀にわたって目をかけてくださるようになった山際先生です。

3人の恩師の目から見て、私はどのように映っていたのでしょうか。たぶん「ちょっと変わっているが面白い」という評価をしてくださったのではないかと感じています。おかげさまで、3人の恩師には半世紀もしくは半世紀に近く、それぞれ師事させていただくことができました。私を見捨てることなく、ずっとご指導くださった山際先生に、心からのお礼を申し上げたいと思います。そして、私が将来再び山際先生にお目にかかったときには、生前のご教導のお礼を申し上げ、教わっていなかったことについても、いろいろとご教示を賜りたいものと願っております。

## 謝 辞

本原稿は、山際先生の奥様の山際かめよ様に、ご遺族の観点から内容のご確認をいただきました。また、山際先生の門下生である上川容市氏には、1996年以降における文献のリストアップにご協力をいただくとともに、先生の門下生の立場から原稿全体の内容についてご確認をお願いしました。

山際先生には、ご生前にさまざまな御教導を賜り、「地に足のつかない私」を「大地の学問」としての「地質・古生物学」の世界へと導いていただきました。また、山際先生を取り巻く多くの方々のご理解・ご協力なくして、私の現在はなかったと確信しております。原稿の編集に際しては、きしわだ自然資料館の柏尾翔学芸員にご便宜を賜りました。以上の方々に厚く御礼申し上げます。



図3. 大阪教育大学天王寺キャンパスにて山際先生との記念撮影（2014年5月14日撮影）。これが山際先生にお目にかかった最後の日となった。